

# 豊玉姫神社・浮嶋八幡社伝世クリスの 基礎的研究

## —産地・年代と伝来経緯の検討—

鈴木 一平

総合研究大学院大学 先端学術院 人類文化研究コース

### 要 旨

本稿は、鹿児島・豊玉姫神社と大分・浮嶋八幡社に伝世した二差のクリスを対象に、その製作地と年代、さらに日本への伝来経緯を検討したものである。クリスはインドネシア・ジャワ島を中心に東南アジア島嶼部で広く用いられてきた鍛造製鉄剣であり、武器であると同時に威儀具や魔除けといった精神的・象徴的機能を有する。14世紀以降には遠隔地にも流通したが、日本伝世例の研究は限定的で、多くが由来不明である。こうした資料の基礎的情報を明らかにすることは、陶磁器を主な手がかりとしてきた従来の交流史研究を補い、東南アジア島嶼部地域の歴史動態を検討する上で重要である。本研究は、対象の観察と関連品との比較を通じ、製作地・年代を比定し、これらを東南アジア交流史の文脈へ位置づけることを目的とした。

本研究では剣身や鞘の形態分析により、両資料は類例関係にあり、14世紀から16世紀前半の東ジャワで製作された可能性が高いことが示された。この時期の東ジャワはマジャパヒト王国の支配下にあり、当時のクリスの現存例は世界でも数例にすぎない。今回の資料はその希少な伝世例にあたり、歴史的価値がきわめて高い。また剣身基部の特徴や蛇行形態は16世紀末以降に展開する型式への移行を示唆し、過渡期の作例として位置づけられる。

搬入については、九州沿岸部の対外交流史や東南アジア陶磁の出土状況と整合的であることが確認された。特に豊玉姫神社の伝世品は、従来想定された17世紀以降ではなく、それ以前に遡る可能性が指摘できる。伝来主体や経路の特定には限界があるものの、日本と東南アジア島嶼部の交流史に具体性を与える事例として重要である。

以上より、本研究は日本伝世クリスの属性を明らかにし、東南アジア島嶼部製品を交流史の枠組みに位置づけるための基盤を提示した。東南アジア島嶼部の交流史的動態を捉える新たな視点を提供する点で、学術的意義を有するものである。

キーワード：クリス、交流史、九州、東南アジア島嶼部地域

---

# A Study of the Keris of Toyotamahime and Ukishima Hachiman Shrine: Provenance, Dating, and Importation

SUZUKI Ippei

Anthropological Studies,  
Graduate Institute for Advanced Studies, SOKENDAI

## Summary

This study examines two keris preserved at Toyotamahime Shrine in Kagoshima and Ukishima Hachiman Shrine in Ōita, focusing on their provenance, dating, and the circumstances of their importation into Japan. The keris, a forged iron dagger, has been widely used across Maritime Southeast Asia, particularly in Java. It functioned not only as a weapon but also as a ceremonial object and protective talisman. From the fourteenth century onwards, keris circulated to distant regions; however, research on examples imported into Japan remains limited, with most cases lacking a clear provenance. Establishing basic information on such items is essential to complement existing studies of interregional exchange, which have largely relied on ceramics, and to deepen our understanding of the dynamics of Maritime Southeast Asia. Through direct examination of the two specimens and comparison with related objects, this study aims to estimate their provenance and date of manufacture, as well as to elucidate the historical background of their introduction into Japan.

Morphological analysis of the blades and scabbard indicates that the two pieces are closely related and were most likely produced in East Java between the fourteenth and early sixteenth centuries. At that time, the region was under the rule of the Majapahit kingdom, and extant keris from this period are exceedingly rare worldwide. These specimens, therefore, represent survivals of exceptional historical value. Furthermore, features at the base of the blades and their serpentine forms suggest a transitional stage towards types that developed after the late sixteenth century, thereby positioning them as examples of this formative phase.

Regarding their importation to Japan, the findings are consistent with evidence from the history of overseas exchange in coastal Kyushu and with the distribution of Southeast Asian ceramics excavated in the region. In particular, the Toyotama-hime specimen may date to before the seventeenth century, earlier than previously assumed. While it remains difficult to determine the precise agents or routes of importation, these keris provide concrete evidence of early interaction between Japan and Maritime Southeast Asia.

In sum, this study identifies and characterises keris imported to Japan and establishes a foundation for situating artefacts from Maritime Southeast Asia within the historical framework of interregional exchange. It offers a new perspective on the dynamics of the region and demonstrates the broader scholarly significance of such material.

**Key words:** Keris, Cultural exchange history, Kyushu, Maritime Southeast Asia

- |                  |                         |
|------------------|-------------------------|
| 1. イントロダクション     | 4. 年代・産地の分析             |
| 2. 豊玉姫神社伝世クリス    | 4.1. 類例品としての形態的特徴       |
| 2.1. 由来調査と先行研究   | 4.2. ジャワ石彫資料との比較        |
| 2.2. 豊玉姫クリスの基礎情報 | 4.3. 鏝阿寺・パガルユン王宮伝世品との比較 |
| 3. 浮嶋八幡社伝世クリス    | 5. 伝来経緯の考察              |
| 3.1. 由来調査と先行研究   | 6. 結語                   |
| 3.2. 浮嶋クリスの基礎情報  |                         |

## 1. イントロダクション

本論文は、鹿児島・豊玉姫神社と大分・浮嶋八幡社に伝世した二差のクリス（Keris）を対象とし（Fig. 1, 2）、由来調査および関連資料との比較検討を通じて、その製作地と年代を明らかにすることを目的とする。その上でそれらがいかなる経緯によって日本にもたらされたのかを考察し、東南アジア交流史の文脈への位置づけを試みる。

クリスとは、現在のインドネシア・ジャワ島を中心に東南アジア島嶼部地域に広く分布する鍛造製の鉄剣の一種で、刺突用の両刃“武器”である一方、贈答品や個人の威儀具、魔除けなどに利用される、精神的側面が強い物質文化であ

る。遅くとも14世紀以降、現在に至るまで継続的に生産・使用されており、日本やヨーロッパなどクリスを使用しない地域にも広くもたらされている。

近世までに日本に将来されたクリスは八点が確認され、そのうち七点が伝世品・出土品の形で現存している（図1）。これらは多くが寺社の宝物として保存され、比較的保存状態がよく、また後世の手による大幅な改変を受けていないという点で貴重な資料である。中でも本稿で扱う二差のクリスは、九州に伝来したという共通性があり、また東南アジアやヨーロッパに伝世する多くのクリスと比較しても古い特徴を有している。しかし、これらの製作地や年代につい

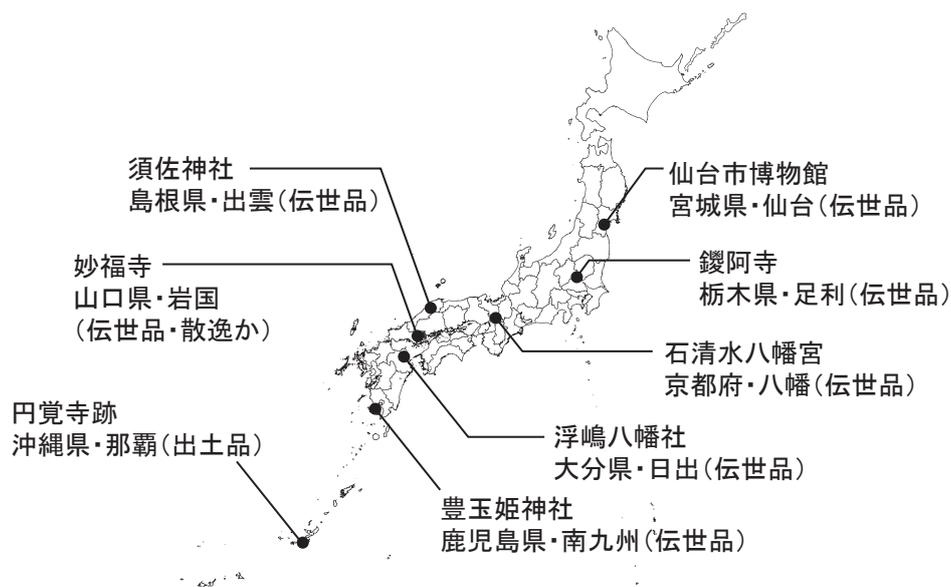


図1 日本伝世・出土クリスの分布

ては未解明のままであり、基礎的な情報すら欠いているのが現状である。

こうした舶来クリスの調査は、貿易陶磁を産さない東南アジア島嶼部地域の動態を明らかにするという点で、現行の中世・近世交流史研究を補完するものとして重要である。第5節で述べる通り、考古学・美術史学における対東南アジア交流史研究は東南アジア大陸部産の貿易陶磁が主であり、島嶼部地域の主体的な活動については研究上の空白となっているのが現状である。本稿で扱うクリスや青銅鏡など金属製品からのアプローチはこうした課題の突破口になる可能性を秘めている。

一方で現時点で日本伝世品クリスについての報告・研究は極めて少ない。唯一、慶長遣欧使節の支倉常長が将来し、伊達家所蔵となったクリス（慶長遣欧使節関連資料・国宝。仙台市博物館所蔵。以下支倉クリスと呼ぶ）を対象とした佐々木和博氏による労作があるが（佐々木 2000, 2013他）、当該クリスは伝来年代や経緯が明確で、その後の情報も比較的豊富という例外的な存在である。他の伝世品については、搬入年代・経緯の情報が欠落していることから、実証可能な研究が停滞していた。

このような状況において、まずは日本伝世クリスの製作地・年代といった基本情報を可能な限り明らかにすることが、交流史研究における第一課題となる。そうしたデータが得られてはじめて、東南アジア島嶼部地域と日本との歴史的関係性を議論することが可能となるからである。

本稿でこの二差を対象としたのは、九州という伝世地の共通性に加え、後に検討するとおり、形態特徴からこれらが類例関係にあると見なし得ることから、同一論文で扱うにふさわしいと考えるためである。本稿では、まず文献史料と先行研究を整理し、続いて関連品を含めた両資料の詳細な観察と比較分析をおこなう。最後にこれらの舶来品がいかなる経緯によって日本に

もたらされたのかを考察し、東南アジア交流史の視点から本資料の意義を論じたい。

本稿で扱う用語<sup>1)</sup>の綴りはジャワ語を基本とし、その他の言語はI. インドネシア語、E. 英語として区別をした。またカタカタ表記はジャワ語の発音ではなく、インドネシア語式の発音を採用した。なお、「クリス学 (E. *Krisology*)」的用語は最小限にし、日本語名称の後ろに括弧書きで記載するに留めた。

## 2. 豊玉姫神社伝世クリス

### 2.1. 由来調査と先行研究

本クリス（以降豊玉姫クリスと呼ぶ）が伝世した豊玉姫神社は、鹿児島県南九州市知覧町郡に位置し、豊玉姫命、彦火々出見命、豊玉彦命、玉依姫命を祭神とする神社である (Fig. 3)。慶応四年 (1868) までは中宮大明神として知られ、明治三年 (1870) に現在の社名となった (所崎 1982: 1061)。本社の創建年は明確でないが、少なくとも社名が登場する最も古い年代である元亨四年 (1324) には知覧の地に中宮大明神が存在していたようであり、その内容から嘉承・天仁年間 (1106–1110) まで遡る可能性も指摘される (所崎 1982: 1070–1071)。詳細な記録は残っていないものの、伝承によれば豊玉姫神社 (中宮大明神) は天正年間 (1573–1592) に火災に遭ったらしい。その後慶長年間に佐多氏十二代領主の忠充により現在地の寄進をうけ移転、また同十五年 (1610) には宝殿を再興している (松元 1962: 541; 所崎 1982: 1072)。

本クリスの由来については謎が多い。現宮司の赤崎氏によれば、やはり天正年間の火災が原因だろうか、多くの記録が失われており、本宝物の伝来に関する記録も残っていないという。後に紹介する新田栄治氏の論稿には、明治以降の目録にはこのクリスについての記録がある、と紹介がされているが (新田 1997: 2)、その目録や内容についての具体的な情報はなく、確認ができない。現在確認ができる最も古い記録は

大正期に入ってからで、下園三州兒編の『新鹿兒島』(1915)がそれである。本書は鹿兒島の地名や名勝についての簡単な事典で、川邊郡の項に「八握穂劔」<sup>2)</sup>の名でこのクリスについて述べられる。日本考古学の草分けの一人である坪井正五郎の考証として、「神代の八握穂劔で今世に稀に見るもの」であるとの評価が紹介される(下園編 1915: 89)。また時代は下るが青木繁の『日本民族渡來考』でも同様に坪井の考証を記載するが、「セレベスの蛮人は今尚これと同一の武器を有しているという」という文が加えられる(青木 1957: 7)。

坪井正五郎(1863-1913)は、弥生・古墳期の銅銚・銅劔研究の関連から東南アジアのクリスにも関心を持っていたことが知られている。1889年の彼の文章から、彼が東京博物館(現東京国立博物館)、足利の鏝阿寺、岩国の永興寺(実際は妙福寺、現在は散逸か)のクリスを認識していたことが窺えるが、この時点では豊玉姫神社については記述がみられない(坪井 1889: 520-521)。彼自身が東南アジアのクリスを認識していたにも関わらず、「八握穂劔」という神代(神武天皇即位以前)の日本の劔と評価したことは、本資料をクリスとして判断しなかったことを示唆する。

先述の新田栄治氏の論稿では、「昭和初年に東京の高名な学者によって、このクリスはセレベスの火焰型劔との鑑定をうけたという」という赤崎宮司からの聞き取りが紹介されている(新田 1997: 2)。年代から考えてこの学者は高橋健自(1871-1929)を指すだろう。日本の銅銚・銅劔研究に体系的に取り組んだ氏は、やはりその関連でクリスについて記述を残しているが、豊玉姫神社伝世品については記載がない。おそらく銅銚・銅劔研究がひと段落した晩年に実見する機会があったものと推察されるが、なぜ彼が他ではないセレベス(スラウェシ)のものと同判断したのかは不明である。

日本文化研究會『九州文化大観』(1940)にも

豊玉姫神社宝物の記載があり、その中に「火焰形劔一振(蛇刀)」の名がみえる(日本文化研究會 1940: 8-9)。また1962年編纂の『知覧郷土誌』には、当社の宝物として「火焰形劔一振 長さ一尺二寸(作者不詳、南海諸島セレベス島特有の武器である。なお東京博物館所蔵のものと同一种のものであって、神代の遺物に相違ないとの考証あり。)」とある(松元 1962: 542)。

その後、1976年11月5日に本クリスは知覧町指定文化財に指定される(村永 1982: 913)ものの、しばらく研究の進展はみられなかった。1997年によろやく、先ほどから言及のある新田栄治氏の論稿によって、このクリスが初めて正面から扱われることになった。内容は、この劔の概要とクリスの教科書的理解、江戸時代の薩摩と東南アジアの貿易状況の考察からなる。クリスの入手について彼は、「当時の貿易状況を踏まえ、マニラにもたらされたジャワのクリスを、マニラに來航した薩摩の商人あるいは船乗りのだれかが、日本では見ることもない刀身が蛇のように屈曲した奇妙な形の短劔に好奇心をもって入手し、薩摩に帰国後、彼が崇敬する豊玉姫神社に奉納したのではないだろうか」と結論づけている(新田 1997: 13-14)。年代について彼は天正年間の火災によって豊玉姫神社の「いっさいの記録や宝物が焼失」したとし、この時期をクリスの上限年代としている。確かにこの火災時に多くの記録や宝物が失われたことは事実らしいものの、その詳細については明確な情報が残っていない状況から、ここまで断言できるかは不明である。また、彼自身の聞き取りから明らかにしたように、当時豊玉姫クリスが宝物としての扱いを受けていなかったことを踏まえると、重要な記録や宝物とは異なる場所に保管され、被災を免れた可能性も十分に考えられる。もしくは、より早い時期に既に鹿兒島にもたらされていたクリスが、天正年間の火災後に神社に寄進された可能性も否定できないことから、火災の年代のみをもって搬入時期を江戸時代初期と

固定して議論を進めるのは早計だろう。さらに産地について彼は、鞘の形態からジャワのクリスである可能性を指摘する。結論のみを見ればその意見に賛成であるが、彼はその根拠として恣意的に選択された19世紀以降の東南アジア各地のクリスの特徴を引き合いにだしており、説得力に欠ける印象は否めない。

一方で新田氏の論文により初めて本資料が「クリス」であることが明記され、また当時の資料状況の記述や、限られた情報の中でその価値と歴史的意義が紹介されたという点で、大きな貢献があったこともあわせて評価すべきである。

その後は、幾つかの文献で本クリスの存在が紹介されることはあったものの、真正面から本資料が扱われることは無かった。これは研究上の障壁によるものというより、日本においてクリスという剣に関心を持つ研究者が多くないことが要因であろう。

## 2.2. 豊玉姫クリスの基礎情報

本資料は剣身 (*Wilah*) と鞘 (*Warangka*) からなる。剣身基部が一方に広がり、その基部の広がり剣身の軸に直角でない (茎や柄の軸に対し剣身が傾く)、また剣身基部にガンジャ (*Ganja*) と呼ばれる盛り上がった縁鏢部 (鏢と鏢の機能を兼ねる部位) が認められる、といった特徴はクリスの定義 (Hill 1956, 12-13) に当てはまり、本資料がクリスであることは疑いようがない。

剣身 (図2-1)<sup>3)</sup> : 鍛鉄製の両刃剣で、7回蛇行する。全長は378mm、刃渡りは313mm、剣身の最大幅は64mm (剣身基部)、最大厚は茎 (*Pesi*) に近い部分で17mmとなっている。茎は角柱形で長さは66mm、幅は剣身に近い部分で8×10mm (縦×横)。剣身は茎の軸に対して約10°の傾きをもち、一定の幅で伸びる。

縁鏢部ガンジャは剣身と一体で作られており (*Ganja Iras*)、尾部には約8mmの厚みがある。剣身基部には前方に方形の凹み (*Blumbangan*)、J字の眉状溝 (*Tikel Alis*) が施される。また基部

から鋒まで剣身中央を鑄 (*Ada-ada*) が通る。

剣身に大きな欠損はなく、比較的状态がよい。剣身の全体を薄い錆が覆うが、部分的にオリジナルの鉄光沢が確認できる (Fig. 4)。また剣身差裏基部には錆化の過程で鉄に置き換わった (*E. mineralization*) 平織片が癒着しており (Fig. 5)、布に包まれて保存されていた可能性が指摘できる。剣身全体の重さは259gである。

鞘 (図2-2) : 木製の鞘、無文。複数の材を貼り合わせるのではなく、一本の材から削り貫いて作られている (*Warangka Iras*)。鞘上部が大きく破損するが、胴部から鞘尻にかけてはオリジナルの状態を残す。残存長294mm (剣身から推定される全長は約320mm)、幅は最大部 (鞘中央) で43.5mm、全体の厚みは現存最大部 (鞘上部) で15.5mmを測る。また鞘材の厚みは約2~3mmで、貼り合わせでないことを考慮すると驚くほど繊細で丁寧な加工である。鞘胴部の断面形態は楕円を基本とするが、鞘上部に近づくにつれ、差表にのみ前方、中央、後方に一本ずつ稜線が現れる (Fig. 6)<sup>4)</sup>。鞘胴部は鞘尻から60mm付近で徐々に幅が減少し、鞘尻は左右対称にならず前方に突起する。鞘表面に彫刻や彩色はないが、褐色の塗装がなされている。木材については、破損部の繊維の走り方や緻密さからビャクダン系 (*I. Cendana Jawa/Timor timur*か) と推察される。

鞘上部の欠損は、偶発的なものと意図的なものが確認される。一般にクリスの鞘上部は前後、特に後方に大きく広がる形態であり、他の伝世品をみても、鞘上部は最も破損が多い部位である。豊玉姫神社資料の場合、差表の破損状況は自然な破損の仕方であるといえるが、差裏には真っ直ぐ切断された部分や、細い切り込みが確認され、意図的に切断されたことが窺える。破損や虫害がこれ以上広がらないための処置が施されたのか、もしくは木材が実際にビャクダンであるならば、香料として一部が転用された可能性も想定される。鞘残存部の重さは25gである。

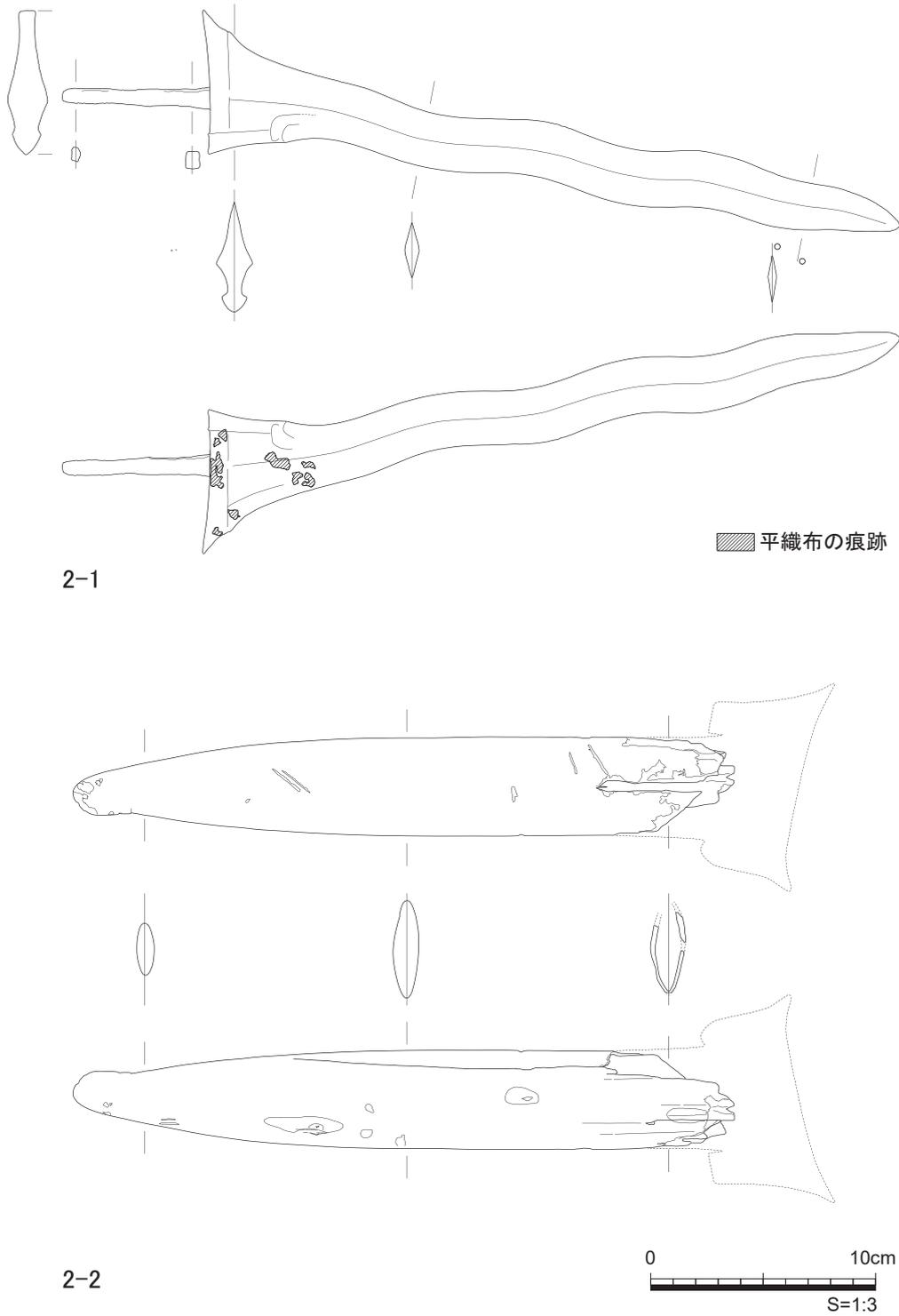


図2 豊玉姫神社伝世クリス（実測図）

### 3. 浮嶋八幡社伝世クリス

#### 3.1. 由来調査と先行研究

クリスが伝世した浮嶋八幡社（浮嶋神社、浮嶋八幡神社などとも呼ばれる）は、大分県速見

郡日出町真那井に位置し、應神天皇、仁徳天皇、仲姫命、仲哀天皇、神宮皇后、日本武尊を祭神とする神社である（Fig. 7）。当社の基盤は、嘉祥元年（848）に真那井の鏡ヶ尾に、天安元年（857）

に浮嶋に遷座した大神八幡宮と伝えられ（中野監修 1995: 432-433）、建久九年（1198）年に鶴ヶ岡八幡宮を勧請し、浮嶋八幡社として成立した。由緒によると、暦仁元年（1238）に大友家二代親秀が、また建治三年（1277）には三代頼泰が荒廃した当社を再築するなど、大友氏との関係が確認される（大分縣速見郡教育委員会 1925: 436-437）。

豊玉姫クリス同様、浮嶋八幡社クリス（以降、浮嶋クリス）の伝来について詳しい情報は残されていない。このクリスに関する最も古い記述は、1839年（天保10年）の目録版『大化帖』で<sup>5)</sup>、「銅銚并鐵銚 同郡<sup>6)</sup> 真那井村浮島八幡社藏」と記されている（後藤 1839）。この鉄銚こそが、本社に伝わるクリスで、本冊子の年代が厳密な下限年代となる。この時点では、弥生時代の遺物である銅銚（戈）とクリスの区別は曖昧であったようで、同列に見られていたが、高橋健自によって本資料がクリスであると初めて明言された。彼は、1916年の「銅銚銅劍考（三）」にて、図譜版『大化帖』編纂者である日名子太郎所持の目録版『大化帖』からこの宝物の存在を知り、実見した結果、「無装のクリス」であったと記述している。また搬入について、大友氏時代以降に南蛮との交流によってもたらされた想定している（高橋 1916: 85）。しかしながら、本資料に限らず日本伝世のクリスは、その後も「クリス型鉄劍」という呼称で、その立ち位置がよく分からないまま、依然として弥生期金属器研究の文脈で扱われてきた。中野幡能は『日出町誌』（1986）内で、本クリスについての情報を整理しているが、弥生期以降の鉄戈である場合の解釈と、南方諸島からの将来品である場合の解釈の双方を示し、「将来の研究にまちたい」と明確な判断をさけている（中野 1986: 508-509）。なお、南方からの将来品であった場合として、中世末期の大友水軍であった真那井衆の手によって日本に運ばれ、彼らのシンボルとして浮嶋八幡社の神宝として扱われた可能性を指摘している。

町誌発行の前後に出版された『日出町の文化財』では、高橋健自のクリス説を引き継ぎ南方からの舶来品とするが、一方で坪井正五郎や神田孝平らに由来する「クリス型鉄劍」の語を利用する。いずれにせよ、高橋健自以降の本クリスに関する情報は、資料紹介や既存言説の再生産にとどまり、クリスそのものの新しい分析結果や言説が登場することはなかった。これは豊玉姫神社伝世のクリスと同じく、単純に研究者の関心を引かなかったことが要因であろう。

なお、本クリスは1972年7月1日付で日出町指定重要文化財に指定されており、その指定名は「鉄製 クリス型劍」である。

### 3.2. 浮嶋クリスの基礎情報

浮嶋クリスの劍身は蝶番のついた木箱に納められ、白布→緞子の鞘袋→白布→紙→劍身の順でくるまれていた。また箱の底には別の白布切れと木製の柄（Fig. 8-8a）、緞子の古い鞘袋（Fig. 8-8b）、中身が昇華した防虫剤の小袋が入っていた。鞘袋や柄など付属品は、日本将来後の後補であると考えられる。

浮嶋クリスの劍身は豊玉姫神社伝世品同様、劍身基部が一方に広がり、劍身の軸が茎に対して傾きをもつ点、劍身基部に縁鏝部ガンジャがみられる点から、本資料はクリスであると判断できる。以下に劍身の詳細な観察結果を記述する。

**劍身（図3）：**直行型の鍛鉄製両刃劍。全長352mm、刃渡りは288mm、劍身の最大幅は70mm（劍身基部）、最大厚は茎に近い部分で17.5mmを測る。茎は角柱形で長さは63.5mm、幅は劍身に近い部分で6.5×10mm（縦×横）。また劍身は茎の軸に対して約10°の傾きをもち、一定の幅で伸びる。

またガンジャは劍身と一体で作られており、その尾部の厚みは約8mmを測る。劍身基部には前方に方形の凹みがあり、そのすぐ上にはJ字の眉状溝が施される。この眉状溝の縁は鋒に向かっ

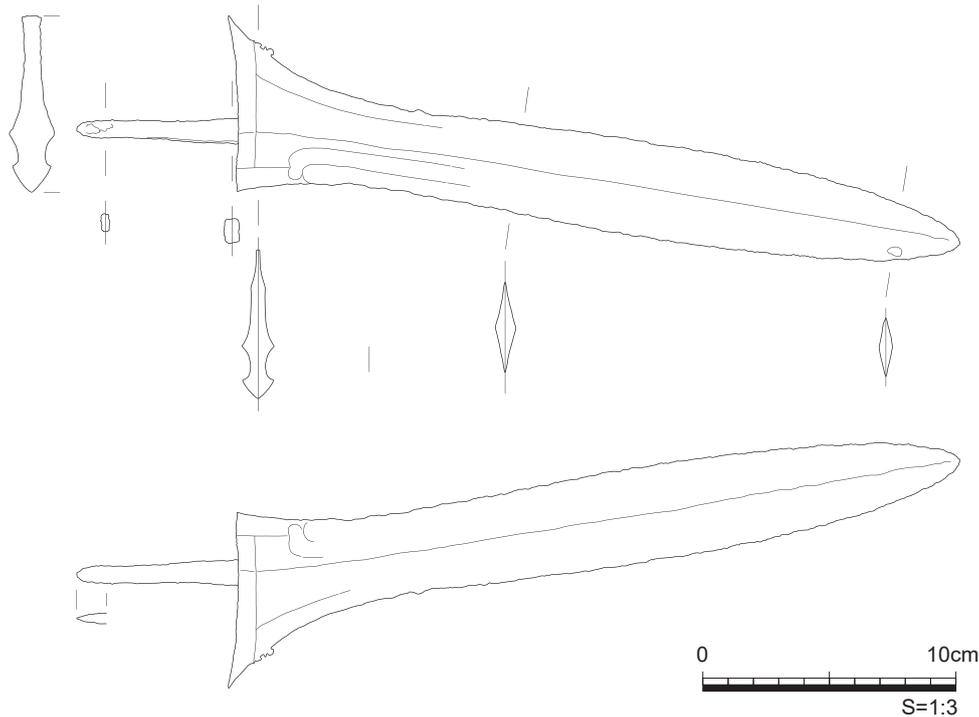


図3 浮嶋八幡社伝世クリス実測図

て稜線を作り、特に差表では剣身中腹まで明確に確認できる。剣身中央には基部から鋒まで鑄が通り、また後方にも*Sraweyan*とよばれる稜線をつくるが、剣身中腹で途切れる。また剣身基部後方のガンジャ付近には鋸歯状突起 (*Gereng*, Fig. 9) がみられる。

剣身全体は鍔で覆われ本来の金属光沢は確認できないが、欠損なく、良く保存されている。また鍔自体は安定しており、破損や錆化による影響を受けやすい茎の形態もオリジナルの状態を保っている。特に表裏から均等に潰される茎先端の形状を残している点は貴重である。剣身の重さは296gを量る。

#### 4. 年代・産地の分析

##### 4.1. 類例品としての形態的特徴

前節では、豊玉姫・浮嶋クリスのそれぞれについて、法量や形態的特徴の記述をおこなった。蛇行/直行という違いがあるため、一見形態的差異が大きいように見えるが、これら二差のクリスは17世紀以降～現代作のクリスには通常見ら

れない異質な特徴もっており、またそれを共有している。このことから、類例品として扱うにふさわしいクリスであるといえる。具体的な例として、まず縁鍔部ガンジャの造りが挙げられる。下限年代が明確な資料のうち、17世紀以降のクリスは通常ガンジャと剣身が分割式 (Fig. 10) であるが、豊玉姫・浮嶋クリスはどちらも一体型である。さらに、角柱形、つまり断面が方形の茎も重要な特徴で、円柱形の茎をもつ17世紀以降のクリスとは明確に異なっている (図4)。茎は剣身と柄を緊密に連結する非常に重要な役割を担っており、断面形の違いは利用法の大きな違い、ないしは変化を表している可能性が高い。このような点から、豊玉姫・浮嶋クリスはこれまで知られていた17世紀以降のクリスとは明確に異なる一群であると考えられる。

##### 4.2. ジャワ石彫資料との比較

豊玉姫・浮嶋クリスが17世紀以降のクリスと明確に異なる一群であることを述べたが、この差異が時代差に由来するものなのか、または地



図4 茎断面形態の比較

域差に由来するものなのかを検討する必要がある。そもそも、学術的なクリスの年代研究はほとんど達成されていない。それは、現存する多くのクリスが19世紀以降のものであり、古いものでも下限年代が16世紀末以前に遡るものはほぼ知られていない<sup>7)</sup> という、直接資料の限界が第一の理由である。そこで筆者はこれまで8世紀から15世紀のジャワ古典期の石彫資料から刀剣図像を集成し、クリスの図像の分析をおこなってきた(鈴木 2024)。その結果、クリスの鞘図像が14～15世紀の東ジャワに登場し、この時期にのみ確認できる2つの特徴があることが明らかになった。その特徴は①鞘上部と鞘胴部の境目に作られる明確な切込み、②胴から先端に向かってすばまり、鞘尻が前方に突起する形態で(鈴木 2024: 57)、東ジャワ・ブルタル県のパナタラン寺院主堂第2層のクレスナヤナ (*Kresnayana*) レリーフに登場するクリス図像、東ジャワ・プナンガン山出土とされる男性像(No. Inv 310d/5136、ジャカルタ・国立博物館所蔵)背面のクリス図像に代表される(Fig. 11)。

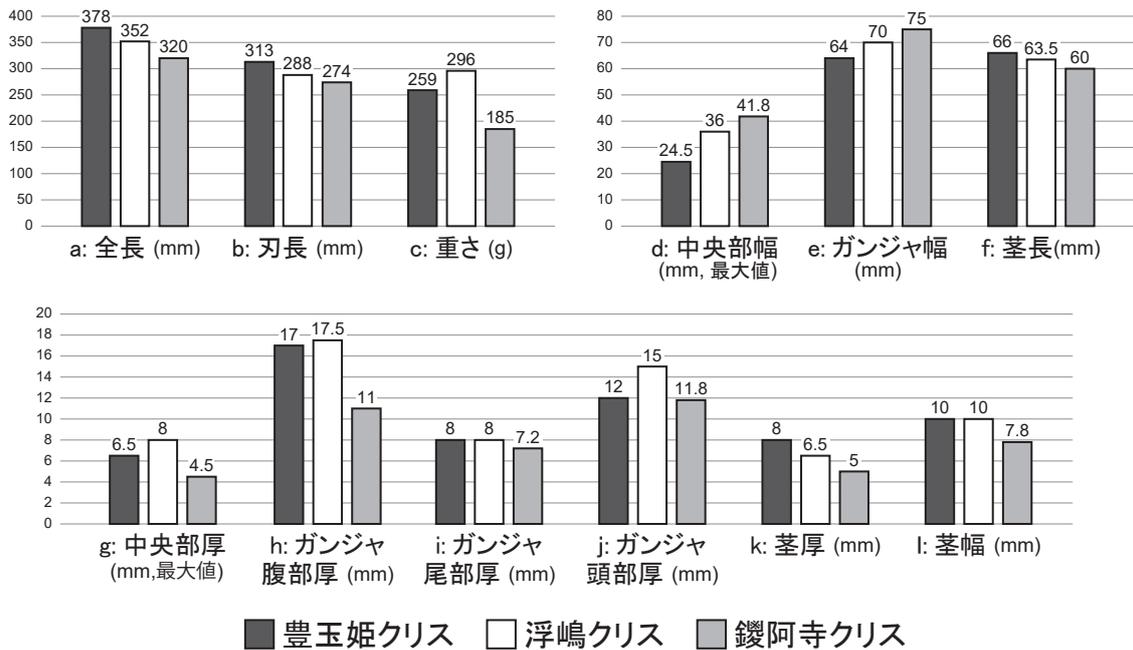
豊玉姫クリスの鞘は、前方に丸く突起する鞘尻(Fig. 12)の特徴が石彫資料に見られるクリス図像の特徴に完全に一致する。こうした特徴をもつクリスは、下限年代が明らかな最も古い段階である16世紀末以降のクリスには知られていないことから、石彫資料の年代である14世

紀から、16世紀前半期までの間に東ジャワでつくられたものである公算が大きい。したがって、それに伴う豊玉姫クリス剣身とその類例品である浮嶋クリスについても、同様の年代・産地に比定することが可能であろう。

#### 4.3. 鏝阿寺・パガルユン王宮伝世品との比較

豊玉姫クリスや石彫資料に見られる鞘形態は、日本・栃木の鏝阿寺やインドネシア・スマトラ島のパガルユン王宮(I. *Kerajaan Pagarruyung*)の伝世品(Fig. 13、以下それぞれ鏝阿寺クリス、パガルユンクリスとする)にも確認がされ、鞘絵画の様式や剣身の象嵌文様から、13～15世紀ごろの生産と考えられる。鞘形態以外にも、これらのクリスは豊玉姫・浮嶋クリスと角柱形茎などの重要な特徴を共有している。一方で、鏝阿寺・パガルユンクリスの剣身は幅広で薄く、縁鏝部ガンジャが別造り<sup>8)</sup> という点において豊玉姫・浮嶋クリスとの違いがみられ、前者からは刺突武器として洗練された印象をうける。実際に各部の数値を比較すると、剣身の厚みと重さに顕著な違いが確認された(表1-c, g, h)<sup>9)</sup>。このようなことから、豊玉姫・浮嶋クリスと同列に語ることを躊躇させる。また鏝阿寺・パガルユンクリスがどちらも直行型であるのに対し、豊玉姫クリスが蛇行型であることの意味も、検討する必要があるだろう。直行・蛇行をふくめたこれらの形態的差異を、同時期におけるヴァリエーションとしてとらえることも可能である一方で、僅かな年代の差と考えることも可能であろう。クリス剣身を描いたと考えられる14世紀中頃の図像はすべてが直行型であり(Fig. 14)、また15世紀初頭の鄭和下西洋にともなう三つの記録には、ジャワのクリスについて詳細に記録されているにも関わらず、蛇行するクリスが記録されていない(馬歡 1617: 爪哇国条; 鞏珍 2000: 4-10; 費信 1928: 爪哇国条)。さらに、ジャワにおいて蛇行型クリスが記録上登場するのは、

表1 剣身各部法量の比較



1516年のバルボサの書が最初である (Barbosa 1921: 177)。このように、石彫図像と文献史料という限られた材料から推測するに、14～15世紀初頭には未登場ないしは一般化していなかった蛇行クリスとその後量産され、16世紀頭にはすでにある程度普及していたと考えることが可能である。この仮説に従うのであれば、豊玉姫・浮嶋クリスは、鏝阿寺やパガルユンクリスよりわずかに年代が新しい可能性が指摘できるだろう。いずれにせよ、豊玉姫クリスは早い段階の蛇行型クリスであると考えられ、また浮嶋クリスの剣身基部にみられる控えめな鋸歯部 (Fig. 9) の存在などからも、これらのクリスを支倉クリスやウィーン世界博物館所蔵クリス (Inv. No. 91.919 ab) に代表されるような16世紀末期以降のクリスへ向かう過渡期に位置づけることが可能であろう。

## 5. 伝来経緯の考察

ここまで、石彫資料や他伝世品との比較から、豊玉姫・浮嶋クリスが14世紀～16世紀前半期の東ジャワで生産された可能性が高いことを確認

した。このことを踏まえ、これら二差のクリスがどのような経緯で日本に搬入されたのか、幾つかの可能性を検討したい。

二つのクリスが伝世した地域の特徴として、中近世における重要な海外交易拠点であったことが指摘できる。鹿児島や大分が南海交流の重要地点であることは、イエズス会宣教師フランシスコ・シャビエル (ザビエル) が1549～1551年の日本来航時に坊津と豊後府内を訪れていることや、応永二十六 (1419) 年の阿多郡へのパレンバン船来航事件 (五味 1966: 6-8) などからも窺い知ることができる。

こうした港と東南アジア地域との関わりは、豊玉姫・浮嶋クリスと近い年代をもつ東南アジア産陶磁器の搬入例から、考古学的な裏付けが幾分可能である。鹿児島の坊津泊海岸では、北部ベトナム産の鉄絵碗片が表採されており (橋口 1998: 66)、これはベトナム貿易陶磁としては早い14世紀中葉～15世紀初葉の年代が与えられている。また坊津のみならず西海岸の万之瀬川下流域もまた、交易拠点としての重要性が指摘されてきた (宮下 1998: 82-83)。知覧・麓川が

合流する万之瀬川流域の上水流遺跡では、14世紀後半～15世紀前半期のバン・プーン窯無釉壺片（上床 2014: 62-63; 鹿児島県埋蔵文化財センター 2008: 186）や15世紀中頃のシーサッチャナライ、メナムノイ系褐釉壺片（鹿児島県埋蔵文化財センター 2008: 140, 197; 同 2009: 168, 171, 271）が出土しているほか、ベトナム中部産長胴容器も出土する（鹿児島県埋蔵文化財センター 2008: 184, 194）。さらに豊玉姫神社からほど近い知覧城本丸、蔵之城跡にも15～16世紀の製品とされるタイ産褐釉陶器片が出土している（鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会 2006: 113-127）ほか、川辺郷地頭仮屋跡では15世紀中期のベトナム青花片も発見されている（橋口 2011: 16）。

他方、浮嶋八幡社のある大分も大友氏を通して東南アジア世界と結びつきを有していた。大友氏の拠点である豊後府内は、16世紀後半期を中心に南蛮貿易の拠点であった。島津の外交僧で禅僧の雪岑津興の記録『頌詩』には、甘埔寨（カンボジア）の君主「浮喇哈力汪加」から大友宗麟へ宛てた書状と、天正7（1579）年に島津義久から「浮喇哈力汪加」へ送られた書状の写しが残されている。これら二通の書状の内容から、1579年以前には既に大友氏とカンボジア領主との間に、書状と贈答物を送り合う直接的な交流があったことが明らかになっている（鹿毛 2012: 28-29）。こうした大友氏のダイナミックな海外交流の様子は考古学的にも窺い知ることができ、中世大友府内町跡では、16世紀末期に廃絶したと考えられる大甕埋設遺構から、メナムノイ系褐釉四耳壺片や、マルタバン・ジャーの名で知られるミャンマー産黒釉三耳壺片、ベトナム中部産長胴容器片（すべて第3次調査、大分市教育委員会 2003: 27-29, 39-41）が、称名寺跡の区画溝からは14世紀後半に遡るベトナム産内白外褐碗片（第11次調査）などが発見されている（大分県教育庁埋蔵文化財センター 2013: 42-43, 西野・西村 2012: 126, 130）。また大友氏と関係の深い館跡である大分県久住町の小路遺跡ではベ

トナム産青花片が発見されている（西野・西村 2012: 126）。このような文書記録や東南アジア陶磁器の出土例を踏まえると、東南アジア島嶼部の剣であるクリスが鹿児島、大分に存在することに全く違和感はない。

トメ・ピレスによる16世紀初頭の記録には、南アジア北東部ベンガルの商人がジャワのクリスをマラッカで仕入れることが記載されており、このころ既にクリスがジャワの主要な輸出品目の一つであったとみえる（Pires 1944: 93）。仮にクリスの年代観を基準に搬入経路を想定するのであれば、前・後期倭寇や琉球人、カンボジアなど東南アジア大陸部系商人、ポルトガル人との最初期の接触による搬入の可能性が考えられる。

以上、クリスの生産年代と伝世地の特色から、クリスの搬入についての一応の検討をおこなったが、ここで示されたものは、数多ある可能性のうちのごく一部であることに留意する必要がある。豊玉姫・浮嶋クリスは共に伝世品であり、クリスの生産年代と伝世地への搬入年代はかならずしも一致しない。日本国内の別の地点に伝世していたものが、近世以前のどこかのタイミングで、現伝世地に移転された可能性も十分にあり得るし、新田栄治氏が展開した薩摩の商人/船乗りによるマニラで入手・搬入説も、アンティーク品が将来されたと考えれば不可能な話ではない。この点については、考古遺物や文献史料などの新発見によって今後明らかになることが期待される。

## 6. 結語

本稿では、鹿児島・豊玉姫神社および大分・浮嶋八幡社に伝世する二差のクリスについて、剣身・鞘形態の分析を通じて年代と産地の検討を行った。その結果、これらのクリスは類例関係にあり、14世紀～16世紀前半期に東ジャワで生産された可能性が高いことが明らかとなった。この時期の東ジャワは、ジャワ最後のヒンドゥー

仏教王国であるマジヤパヒトの勢力下にあったと考えられ、本作はこの時期のクリスとして世界で4、5例目にあたる極めて貴重な伝世例である。また、蛇行形や剣身基部の鋸歯状突起の存在などから、16世紀末期以降のクリスへ向かう過渡期に位置する可能性も示唆される。

さらに、日本への搬入についても検討を行った。文書記録や東南アジア貿易陶磁の出土例から、伝世地である鹿児島と大分への搬入は、従来の考古学的・歴史学的理解と矛盾しないことが確認された。また豊玉姫クリスについては、これまで搬入年代として検討がされてきた17世紀よりも遡る可能性があることを提示した。一方で、伝世品という資料の特性上、具体的な搬入主体や経路を明確に特定することには限界があり、ここでは幾つかの可能性を提示するにとどめた。

日本と東南アジアとの交流史研究は、歴史学と考古学が相互に補完し合いながら進められてきた。しかし、貿易陶磁をほとんど産出しない東南アジア島嶼部地域の活動動態、とくに現地側の主体性を考古学的に検証することは極めて困難である。本研究は、東南アジア島嶼部地域の大国であったジャワの鉄剣クリスを対象とし、その検証を通じて同地域の動態を捉えようとする試みの一つである。伝世品という対象資料の制約はあるものの、東南アジア島嶼部製品を交流史の中に位置づけるための基礎を構築する作業として、一定の学術的意義があると考えられる。

本稿の課題としては、得られた生産年代に幅があるということと、搬入年代については推測の域を超えることができない点が挙げられる。前者に関しては、対象が伝世品であっても、年代情報を可能な限り掘り取り、情報を集成していくことで、その精度を徐々に高めていくことが可能である。また考古学的な型式分類と編年や、金属組成分析などの理化学研究に活路を見出すこともできるだろう。このような研究法は、

クリスという限定された地域、年代に生産された資料に対しては現時点では有効であると思われる。いずれにせよ、交流史や地域史といったより細かい議論のためには、より多くの資料を一点ずつ詳細に検討することの積み重ねが不可欠である。

## 謝辞

豊玉姫神社伝世クリスの調査においては、宮司の赤崎千春氏、権禰宜の赤崎大輝氏に、宝物調査の許可という特別な高配を賜った。実際の調査では南九州市教育委員会の坂元恒太氏、折田裕斗氏の手を煩わせた。浮嶋八幡社での調査は、宮司ならびに氏子の皆様、日出町教育委員会の中尾征司氏、梅野敏明氏の協力なしには実現しなかった。関連資料の調査ではインドネシア国立博物館のYustina氏、大阪・国立民族学博物館の望月由衣氏のお手を煩わせた。また本稿の執筆に際し、小野林太郎先生より多くのご指導を賜った。ここに心よりお礼申し上げます。最後に、自信をもってクリスの研究を継続してこれたのは、故久保智康先生の励ましと助言あってこそである。心より感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈りします。

本研究の成果の一部は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2104および人類文化研究コース派遣事業の支援を受けたものです。

## 註

- 1) クリスの部位名称は地域・時代によってばらつきがあり、統一されていないため、本稿では鈴木（2024）の記載に従った。
- 2) 見出しでは八握劔穂となっているが、八握穂劔の誤植である。
- 3) 図2の剣身・鞘の方向について、着用時の関係性でいえば、2-1ないしは2-2のどちらかを180度回転すべきである。しかし、通常剣身に具象画像の装飾を施す場合、鋒を上にした向きで図像が描かれ、また鞘については、鞘絵画が施される場合は鞘口を上にするのが慣例である。こうしたジャワにおけるクリスの上下の認識は、少

なくとも17世紀から現代まで一貫していることから、本稿でもその認識にしたがって図を配置した。

- 4) 三次元モデルの作成には、Nikon Z50デジタルカメラを用いて対象物の画像を撮影した。撮影した画像はAgisoft Metashape Professional v 2.2.0によりStructure-from-Motion (SfM)を用いて三次元点群を生成し、その密な点群を基に三次元モデルを構築した。最終モデルの精度誤差はすべて±0.1mm以下である。なおそれぞれの撮影条件(絞り値、露出時間、ISO感度、光源)は次の通りである。Fig. 6:絞り値F11、露出時間1/6秒、ISO 640、室内環境光+覆い布。Fig. 11上段:絞り値F11、露出時間1/125秒、ISO 125、曇天時自然光。Fig. 11下段:絞り値F10、露出時間1/100秒、ISO 3200、自然光/室内環境光。Fig. 14:絞り値F10、露出時間1/100秒、ISO 400、曇天時自然光。
- 5) 後藤真守(碩田)による目録。日名子太郎による同名の図譜(1912)に先立って作られた。筆者は九州大学中央図書館所蔵本を参照した。
- 6) 速見郡
- 7) 16世紀末以前のクリスとしては、唯一、オランダ・アムステルダム世界博物館(旧トロペンミュージアム)のクリスTM-6046-1が知られている。剣身に刻まれたサカ暦1264年(西暦1342年)の紀年銘や装飾様式などから、14世紀中頃にクリスが存在した可能性は肯定される。しかしこの資料は剣身に取り付けられた装飾銅製版や銹化の影響、また鞘や柄を伴わないという理由から、年代指標としては扱いつらいという問題がある。また近年、同時期のジャワで製作されたと考えられるクリスが日本の饒阿寺でも見つかっており、年代指標資料として期待されている。これらのクリスについては近々別稿で出版予定である。
- 8) 本作によってガンジャを別造りにする例は17世紀以前には既にあったことがわかる。一方で現代作品を除いた17世紀以降のクリスのうちに、一体型ガンジャのクリスは見つかっていない。
- 9) 重量については一見浮嶋クリスが突出しているように見えるが、本資料は銹化の進行が著しく全体が厚い錆に覆われていることから、この値は参考値である。製品本来の重量はもう少し減少する可能性が高い。

## 図版詳細

図1・2・3・4:筆者作成2025。Fig. 1, 3, 4, 5:

筆者撮影2021。Fig. 2, 7, 8, 9:筆者撮影2022。  
Fig. 10:筆者撮影2024。Fig. 6, 11, 14:SfM-MVS  
を用い筆者作成2025。Fig. 12:筆者作成2025。  
Fig. 13:Wereld Museum Amsterdam所蔵TM-  
10026839(Public Domain Anonymous 70 EU)を  
一部改変(右)、筆者撮影2023(左)。

## 引用文献

- 青木 繁  
1957 『日本民族渡来考』青木繁。
- 上床 真  
2014 「万之瀬川下流の上水流遺跡出土東南アジア陶器の資料紹介」『縄文の森から』7:57-64。鹿児島県立埋蔵文化センター。  
大分市教育委員会  
2003 『大友府内5 中世大友府内町跡第3次調査報告』大分市教育委員会。  
大分県教育庁埋蔵文化財センター  
2013 『豊後府内17 中世大友府内町跡第11・72・76・80次調査』大分県教育庁埋蔵文化財センター。
- 大分県速見郡教育委員会  
1925 『豊後速見郡史 全』大分県速見郡教育委員会。
- 鹿毛敏夫  
2012 「戦国大名の海洋活動と東南アジア交易」『貿易陶磁研究』32:23-33。日本貿易陶磁研究会。
- 鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会  
2006 『国指定史跡 知覧城跡(三)』鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集、鹿児島県川辺郡知覧町教育委員会。
- 鹿児島県埋蔵文化財センター  
2008 『上水流遺跡2 古墳時代から近世編』鹿児島県立埋蔵文化財センター。
- 後藤碩田(真守)  
1839 『大化帖』後藤碩田。
- 五味克夫編  
1966 『志布志 阿多文書』鹿児島県史料拾遺VII、鹿児島県史料拾遺刊行会。
- 佐々木和博  
2000 「支倉常長将来「南蛮剣」試論」『國學院大學考古学資料館紀要』16:62-104。國學院大學考古学資料館。  
2013 『慶長遣欧使節の考古学的研究』六一書

- 房。  
下園三州兒編  
1915 『新鹿兒島』吉田書店。
- 鈴木一平  
2024 「14～15世紀のクリスの型式学的研究—東部ジャワ石彫資料の検討から」『東南アジア考古学』43: 41-59。東南アジア考古学会。
- 高橋健自  
1916 「銅銚銅劍考(三)」『考古學雜誌』7(2): 83-95。考古學會。
- 所崎 平  
1982 「第六編 神社・寺院、第一章 神社」知覧町郷土誌編さん委員会編『知覧町郷土誌』1061-1117。知覧町。
- 松元清志  
1962 「第十編 神社・寺院、第一章 神社」知覧町郷土史料調査委員会編『知覧郷土誌』539-567。知覧町。
- 村永 薫  
1962 「第五編 近代・現代、第七章 教育・文化」知覧町郷土史料調査委員会編『知覧郷土誌』799-919。知覧町。
- 坪井正五郎  
1889 「パリー通信」『東京人類學會雜誌』43: 516-524。
- 中野幡能  
1986 「第四編 日出のあゆみ、第一章 太古の日地町」大分県速見郡日出町編『日出町誌 本編』471-532。大分県速見郡日出町。
- 中野幡能監修・平凡社編  
1995 『大分県の地名』日本歴史地名大系45、平凡社。
- 西野範子・西村昌也  
2012 「ベトナム陶磁史からみた大分県出土のベトナム陶磁の位置づけ」『貿易陶磁研究』32: 125-141。日本貿易陶磁研究会。
- 新田栄治  
1997 「知覧・豊玉姫神社所蔵のクリスと薩摩の東南アジア貿易」『ミュージアム知覧紀要』3: 1-14。ミュージアム知覧。
- 橋口 亘  
1998 「鹿兒島県坊津町泊海岸採集の陶磁器」『貿易陶磁研究』18: 65-69。日本貿易陶磁研究会。
- 2011 「第一章 南九州出土の東南アジア産陶磁についての一考察」荒武賢一郎編『陶磁器流通と西海地域』周縁の文化交渉学シリーズ4、13-21。関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS)。
- 日本文化研究會  
1940 『九州文化大観』第2版、日本文化研究會。
- 宮下貴浩  
1998 「鹿兒島県持鉢松遺跡と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』18: 70-85。日本貿易陶磁研究会。
- 馬歡  
1617 「瀛涯勝覽」沈節甫編『紀錄彙編』卷62。明。
- 鞏珍著・向達校注  
2000 『西洋番國志・鄭和航海圖・兩種海道針經』中華書局。
- 費信  
1928 『星槎勝覽』國立中山大學語言歷史學研究所史料叢刊2。
- Barbosa, Duarte  
1921 *The Book of Duarte Barbosa* (1516) 2. Translated by Mansel Longworth Dames. London: Hakluyt Society.
- Hill, A. H.  
1956 *The Keris and Other Malay Weapons*. Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society 29(4): 7-67. Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society.
- Pires, Tomé  
1944 *The Suma Oriental of Tomé Pires: An Account of the East, from the Red Sea to Japan, Written in Malacca and India in 1512-1515*. Translated by Armando Cortesão. London: Hakluyt Society.

2025年8月29日 受付

2025年11月17日 採択決定



Fig. 1 豊玉姫神社伝世クリス



Fig. 2 浮嶋八幡社伝世クリス



Fig. 3 豊玉姫神社社殿外観



Fig. 4 豊玉姫クリス剣身金属光沢



Fig. 5 剣身に癒着した布の痕跡



Fig. 6 鞘差表上部の稜線 (矢印部分)



Fig. 7 浮嶋八幡社社殿外観



Fig. 8 付属する柄と鞆袋（後補）



Fig. 9 鋸歯状突起



Fig. 10 分割式ガンジャの例  
国立民族学博物館（大阪）蔵 H173133（20世紀）

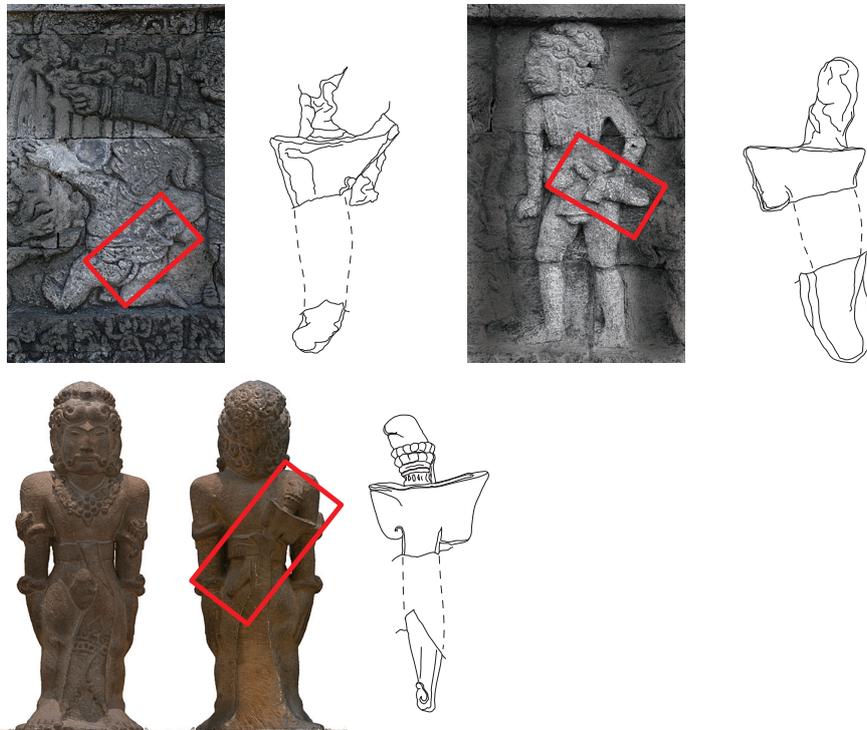
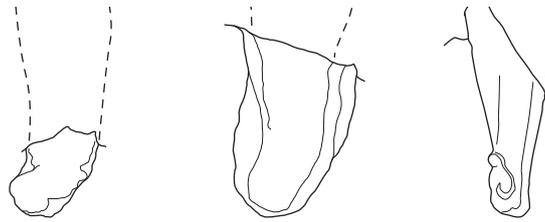


Fig. 11 石彫資料に見られるクリス鞆図像  
上段：バナタラン寺院主堂第2層  
下段：伝プナンゲンガン出土男性像



豊玉姫クリス鞘尻（左：写真、右：実測図）



クリス図像の鞘尻（中央のみ反転）

Fig. 12 鞘尻形態の比較

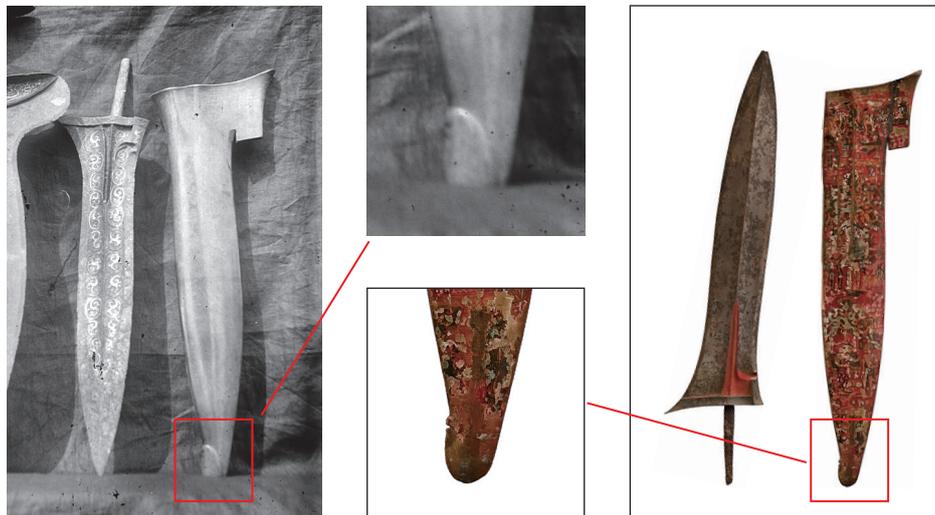


Fig. 13 鑊阿寺クリス（右）とバガルユンクリス（左）の鞘尻形態



Fig. 14 パナタラン寺院主堂第2層第3レリーフ（左）、第5レリーフ（中央）、第6レリーフ（右）